

「イキヅライ」を経て

与理原奈那

最近の僕の中では死語になりつつあるのだが、二十代の頃、「イキヅライ」が自分の流行語になっていた。「イキヅライ」とは何だ、とする向きもあるうが、目の前の箱で検索して把握しておいてほしい。

僕が思うに、若者に多い「イキヅライ症候群」の原因は主に、視野の狭さにある。社会に出たばかりの頃、心ないオジサンオバサンに、プライベートなことをいろいろ言われていやな思いをする日もあるだろう。

「アレを持ってないといけないのか」「コレが正解で、僕の生き方は……」などとクヨクヨする前に、一歩下がって見てみるといい。余計なことを言ったり、貶めたりしてくる人というのは、たいてい何も持っていない、のである。あるいは、持っているように見えても、実はハリボテなのだ。そのハリボテの剣で、イタイケな丸腰の若者を、「今だぁッ!」とばかりに斬りつけようとしているのである。

……滑稽だろ。

三十過ぎると余計に、ダサい生き方だなと思うよ。

僕は若い頃、「狭い世界で他人様の生き様にブツブツ言ってるような大人にはなりたくないなア」とぼんやり思っていた。何も海外に行かなくなたって、人類が多様性に満ちていることなんか分かるのに、「○○じゃないなんてッ!」とヒトのジンセイ警察しているんだからサ。

逆に、「持ってる」大人というのは、くれるのだ。高級腕時計とかお小遣いを、とかじゃなくて、目に見えない何か、「知識と経験」というやつだ。役職も立場もカテゴリーも性別も関係なく、カッコイイ大人というのは、丸腰の若い者を見たら、大小とその使い方を与えてくれるものなのだ。

ちなみに僕はギターをやっているのだが、ギターも弦も、一緒にバンドをやった先輩ギタリストからの貰い物である。いっこうにうまくならないので、ギターの弾き方を教えるのとかは無理だけど、自分もいつか、何かを「あげる側」になりたいものだ。まずは誰かの「イキヅライ」の糸をちよつとずつ、ほどこいていくことができればいいナ。